

*Heart of Darkness*における「怪物性」と 「狂人的利己主義」としてのニーチェ思想

今川 京子

Abstract In this paper I will discuss the novella *Heart of Darkness* (1899) and compare Kurtz's philosophy with Nietzschean philosophy so as to address Kurtz's monstrosity. Although Conrad dismissed Friedrich Nietzsche's philosophy as a 'mad individualism' (*CL* II: 188), *Heart of Darkness* reveals Nietzsche's core belief, for instance, the Superman, 'the Power to Will,' and the 'transvaluation' of all values. In place of Nietzsche's Superman, Zarathustra, Conrad created a cannibalistic and grotesque monster, Kurtz. Needless to say, Kurtz is not the Superman, though his soul 'struggled blindly with itself' overlaps Nietzsche's theory of 'self-overcoming.' Kurtz is the incarnation of Power to Will and he embodies Yeatsian point of 'things falling apart.' The Russian's fractional words, '[y]ou can't judge Mr Kurtz as you would an ordinary man,' 'he enlarged my mind,' and 'he made me see things - things' prove the monstrous Kurtz to be a touchstone of mankind and the social organism. He is the man who reaches good and evil. While criticizing Nietzschean philosophy a 'mad individualism,' Conrad recognizes that it makes both the modern world and humankind as 'a whited sepulchre.'

「怪物／怪物性」の問題は、人間の無意識下に潜む欲望——「文明化」や「進化」というヨーロッパ的観念、幻想からの解放——で同時に、思想基盤となる足場の崩壊を意味する。表象としての「怪物／怪物性」は社会機構を外側から見つめる際に、その自己欺瞞的で偽善的性質といった意味での怪物的な秩序体制を暴露するものとして存在し、その対極として混沌と生なまの自然がもつ無限の不気味さを伝達する多義性を有する。すなわち「怪物／怪物性」とは異化装置としての使命を帯び、隠蔽された虚偽を、また人々の仮面を引き剥がす逆説的な存在となる。

この視座で近代を直視して時代の心理を解明し、目に見えないコードやイデオロギーが人間をいかに支配しているのかを「怪物」を介して逆説的に捉え、個人の権力意志を通じて人間存在を問うたのがコンラッドである。コンラッドの小説における、いわば時代を映す怪物的プロタゴニストの行為が意味するものは既存の社会を支える数多の規範や倫理性、価値秩序の転覆であり、人間性の混沌とし、多義性に富んだ潜在的側面を可視化するカーニヴァル的な行為である。「怪物」という言説は既存の社会の歪みを顕在化し、異化する。

A Personal Record で明かしているように、19世紀後半の西洋の風潮であった人道主義的思想や行為の全てが、コンラッドにとっては‘that humanitarianism that seems to be merely a matter of crazy nerves or a morbid conscience’であり、自己欺瞞の生産装置と映っていた(‘Author’s Note’ to *A Personal Record* vii)。この認識を反映しているのが本稿で扱う *Heart of Darkness* である。本作品は社会の潤滑油として機能する一切の建て前を自意識的に排除した世界観となっている。

かつてニーチェが『悲劇の誕生』(1872)の中でギリシア文化を形成する精神として提示した二つの極層、アポロ的精神とディオニュソス的精神に則^{のつと}って作品を解釈するならば、アポロ神に象徴される理知、均整、秩序を体現するクルツが原始との邂逅を通じ、やがてディオニュソス的精神へ、人間の奥深い本能、情熱、狂乱という別な一面を持つ知へと覚醒していく。クルツの放つ強烈な力は、近現代の人間の精神的墮落を象徴するキーワード、中庸の対極に位置するものとなっている。本章ではニーチェの超人思想とクルツの在り方を検証しつつクルツの怪物性について論考していく。

I. クルツの完全知のヴィジョン

クルツの今^{いま}際^{きわ}の際の言葉‘The horror! The horror’(178)は、セドリック・ワッツ (Cedric Watts) によると聖書の詩篇(55:4-5)の引喩の可能性があると¹いう。クルツのこの辞世の言葉を耳にした当時のマーロウの様子を振り返る。

I saw on that ivory face the expression of somber pride, of ruthless power, of

craven terror--of an intense and hopeless despair. Did he live his life again in every detail of desire, temptation, and surrender during that supreme moment of complete knowledge? He cried in a whisper at some image, at some vision, —he cried out twice, a cry that was no more than a breath—. (177)

クルツの眼は、もはや物質的世界の光は見ることができない代わりに、普遍的な知の光を見据えている²。マーロウはクルツの眼差しをこう描写する。‘[the meaning of his stare] was wide enough to embrace the whole universe, piercing enough to penetrate all the hearts that beat in the darkness’ (178-79). そして辞世の言葉の中に一つの信念を見出す。‘[I]t had a vibrating note of revolt in its whisper, it had the appalling face of a glimpsed truth--the strange commingling of desire and hate’ (179). ここで証左される心境こそ、知の開拓者の心に取りついて離れない自己嫌悪と恐怖、タブーを犯していることを自覚するなかで感じる慄きの表現である。この感覚は魂と格闘しつつ知の実への欲望に突き動かされた者特有の普遍的メンタリティーである。マーロウの考察は続く。‘[P]erhaps all the wisdom, and all truth, and all sincerity, are just compressed into that inappreciable moment of time in which we step over the threshold of the invisible’ (179). クルツの言葉と彼の許婚についてのマーロウの嘘の意味を再考するに当たり、マーロウが許婚の家の呼び鈴を鳴らしたときに襲われる錯覚を検討しよう。

He wanted no more than justice—no more than justice. I rang the bell before a mahogany door on the first floor, and while I waited he seemed to stare at me out of the glassy panel—stare with that wide and immense stare embracing, condemning, loathing all the universe. I seemed to hear the whispered cry, ‘The horror! The horror!’ (182)

宇宙全体を睥睨する視点、それは人智を超えた者いわば神の座に君臨する者の眼差しである。クルツの立脚点は全ての人間の精神、社会そのものが崩壊する極点にある。

一方で中庸の徳を具える常識人マーロウは、原初的で剥き出しの人間存在へと変貌したクルツの精神性と功罪を理解し、ある種評価するだけの眼

力と勇敢さを兼ね備えている。西洋社会の人間が内に封じ込め、意識的に目を背けている欲望や権力志向、破壊衝動を顕在化したクルツという十字架を背負い、マーロウはイギリスに帰国する。マーロウにとってこれは妥協であり、彼は消極的選択として文明圏へ帰還する。クルツとの邂逅により、当初抱いていた西洋的モラルや西洋的正義の偽善や脆弱さ、自己欺瞞を突きつけられることで瓦解した世界観を、妥協でもって再構成しようとするのがマーロウのスタンスだ。マーロウは人類の進歩の歴史を遡っていった果てに、ある種、神の知と悟りを啓いた男クルツを見出したのである。その時の衝撃の再現とも取れる精神的パニックをマーロウはクルツの許婚を前にして覚える。

I asked myself what I was doing there, with a sensation of panic in my heart as though I had blundered into a place of cruel and absurd mysteries not fit for a human being to behold. (183)

この衝撃は、クルツを知った時のマーロウのそれであり、同時に読者の衝撃の反響音である。なぜならば史実に則って現実の社会そのものを振り返るとき、そのシステムのなかにも、クルツ的欲望が潜んでいることを認識するからだ。例えば、文明社会の正義を掲げて繰り広げられる戦争は、同時に人間にとって殺戮と残虐な行為が一種の快樂現象となり、感じてはいけなはずの欲望への渇きが人間の精神に潜勢していることを明らかにする場であり、現存在としての地獄である。そこは、残酷な暴力と死への恐怖が支配し、破壊と虐待と他人を怯えさせることから喜びを得る、ぞっとするような空虚な^{はいきよ}廢墟と化す精神が衝突し合う地獄である。コンラッドが投げかけた諸々の問いに対する答えが‘The horror! The horror!’であり、その深淵を探究し尽したクルツの得た天啓となっている。

II. クルツの怪物性

近現代が抱える人間の偽善や欺瞞に真っ向から取り組んだのがニーチェであるとすれば、この偽善や欺瞞を近現代の時代的特質と捉え、自己欺瞞や偽善を社会問題として扱ったのがコンラッドである³。コンラッドは

‘mad individualism’ とニーチェの思想を批判しているが (CL II: 188)、クルツの自己の魂との格闘を見る限りそこには確実にニーチェの思想のエコーが響いている⁴。

コンラッドは西洋知の輝かしい光彩を放ちながらコンゴに到来したクルツを原初帰りさせることで、中庸性のなかで空疎な存在と化した近現代人の意識を逆説的に浮かび上がらせる。クルツという剥き出しの存在が ‘a whited sepulchre’ (110) という表象に収斂されていく西洋世界を生体解剖していく役割を演じるのだ。そのヒントとなるのがマーロウの言う ‘the life-sensation’ (130) という感覚である。

“[I]t is impossible to convey the life-sensation of any given epoch of one’s existence,—that which makes its truth, its meaning—its subtle and penetrating essence. It is impossible. We live, as we dream—alone....” (130)

制度や権威、権力、宗教といった西洋的知の産物が担う役割を総括すれば、それは人間の秘められた欲望の仲介者であり、また守護神である。これら権威的建前を大義名分に奉じ、ある種フェティッシュな信仰レベルにまで昇華させ額づくことで人間の生の営みは安全を保障され、正常に機能し、継承されてきた。コンラッドはその様を揶揄して ‘enchanted’ と表現する。自覚なき偽善の虜囚として貿易会社の社員たちの存在があり、マーロウは彼らを ‘the bewitched pilgrims’ (129) と呼ぶ。このような現代人たちが代償として無自覚の内に放棄したのが ‘the life-sensation’ (130) である。

クルツの放つ恐ろしさとは、あまりにも偽りが無い点にある。偽ることで機能する世界のなか、偽らざる人物が偽りに満ちた世界と接触するとき生じさせる攪乱^{かくらん}は、秩序を崩壊させ、人間の存在までも脅かす。クルツの罪とは、象牙の乱獲でもなく、現地人の殺戮でもなく、自身を神に創出したことでもない。偽善と虚偽によって人間の原動力の核心たる力への欲望を覆い隠して安寧に回転していた世界に、その保護膜たる欺瞞や偽善を徹底的に破壊し転覆させ、人間の無意識下に潜む暗黒領域を投射し、その破壊的で同時に生産的なパワーを顕現させたことにあるのだ。

クルツのカニバリスティックな怪物性は随所に散りばめられているが、

その象徴的行為を二点挙げる。一つは‘certain midnight dances ending with unspeakable rites, which...were offered up...to Mr Kurtz himself’⁵ (155)であり、今一つはクルツの家の周囲に巡らされた柵を飾る首である。‘These round knobs were not ornamental but symbolic; they were expressive and puzzling, striking and disturbing’ (164)と説明される強烈で不穏なこの象徴物について、連載当時は更に‘they were symbolic of some cruel and forbidden knowledge. They were’⁶と補足されている。権力意志を剥きだしにしたクルツが創作した‘heads on the stakes’⁶ (164)は一つの映像として、社会という柵の内側に保護されている我々を嘲笑し、打ちのめすのである。

I [Marlow] returned deliberately to the first I had seen—and there it was, black, dried, sunken, with closed eyelids, —a head that seemed to sleep at the top of that pole, and, with the shrunken dry lips showing a narrow white line of the teeth, was smiling too, smiling continuously at some endless and jocose dream of that eternal slumber. (164)

コンラッドがニーチェの思想の精髓を‘mad individualism’⁷と捉えた意識が、クルツの怪物性を証す‘cruel and forbidden knowledge’の行為という形で反映されている。その意味で、クルツとはバフチン(Mikhail Bakhtin, 1895-1975)の言うところの悪漢、愚者、そして愚者の仮面をつけた悪漢である道化、これら三つの要素の混合体的な「怪物」ということになる。クルツは一連の行為を通じて純粹に食欲に無心に力への欲望に身を委ね、力を所有し、‘the life-sensation’によるロマン派的感覚の目覚めのイメージをパロディー化してみせる⁷。

現代人にとっての耳障りな‘wild and passionate uproar’ (139)に共鳴し、その音のなかに‘the terrible frankness’ (139)の響きを聞き取った結果、精神を覚醒させたのがクルツである。人間として実在するために、また人間であり続けるために定められた限界に叛逆し、その境界を踏み越えたクルツは、人間であるための生命維持装置ともいえる欺瞞に一石を投げ、世界の水面に限りない波紋を生ぜしめた。

クルツが野性の申し子へと生まれ変わる過程をマーロウはこう説明して

いる。

[I][the wilderness] had taken him, loved him, embraced him, got into his veins, consumed his flesh, and sealed his soul to its own by the inconceivable ceremonies of some devilish initiation. (153)

このように‘the heavy, mute spell of the wilderness’ (173)に魅惑されたクルツの魂の変化についてはこう述べられている。‘this[the spell of wilderness] alone had beguiled his unlawful soul beyond the bounds of permitted aspirations’ (174)。さらに続けてこう表現する。

I tried to break the spell—the heavy, mute spell of the wilderness—that seemed to draw him to its pitiless breast by the awakening of forgotten and brutal instincts, by the memory of gratified and monstrous passions. (173)

ニーチェ的思想に依拠して考えるならば、価値の価値に疑問を突きつけ、モラルのモラルを問うてみせるクルツの存在を示唆するものとして、‘the International Society for the Suppression of Savage Customs’ (154-55)に提出する心づもりでいた小論文にクルツが後から書き加えた言葉がある。マールウはこう述べる。

It was very simple, and at the end of that moving appeal to every altruistic sentiment it blazed at you, luminous and terrifying, like a flash of lightning in a serene sky: ‘Exterminate all the brutes!’ (155)

‘Exterminate all the brutes!’というシンプルかつ衝撃的な表現は西洋的虚飾で彩られた善なる理想を打ち砕く。これは人間の究極的エゴイズムを表している。この破壊的な言葉は西洋的欺きの一切を穿つ力を発散しており、中庸性に対する徹底した否定と西洋的理念や理想に対する嘲笑であり、悪魔的反逆にほかならない。人間の内に潜勢する破壊衝動、権力への欲望、歪んだヒロイズムや自己愛に耽溺し、一連の欲望に魂を委ねた瞬間のクルツの奢りを読み取ることができる。他者との共生を拒絶する‘Exterminate

all the brutes!’は、植民地主義の「悪」にマインドコントロールされた「弱者」の一員である男が発した呪詛の叫びである。

‘I am Mr Kurtz’s friend—in a way’ (170)とクルツに一定の理解を示すマーロウ自身も、かつてクルツが野性との語らいのなかで受けた精神的衝撃と同種の経験をすることになる。それはクルツの姿があるはずの船室に彼がいないのを発見したことが原因でマーロウを襲う圧倒的かつ抽象的な恐怖だ。

The fact is I was completely unnerved by a sheer blank fright, pure abstract terror, unconnected with any distinct shape of physical danger. What made this emotion so overpowering was—how shall I define it?—the moral shock I received, as if something altogether monstrous, intolerable to thought and odious to the soul, had been thrust upon me unexpectedly. (171-72)

この抽象的な恐怖は、クルツの魂と対峙するマーロウの試練の伏線となる。

I had to deal with a being to whom I could not appeal in the name of anything high or low. I had, even like the niggers, to invoke him—himself--his own exalted and incredible degradation. There was nothing either above or below him, and I knew it. (174)

ここからも明らかなのが、クルツとは基盤たるものの一切を拒絶し、宙吊り状態で人間としての限界に挑んだという意味で、ニーチェの超人思想を彷彿させる存在だということだ。人間の皮膚の下に潜む力への欲望、力を所有することへの強烈な意志を自らの存在で以って突きつけてくるクルツとは恐ろしい存在である。人間としての仮面を脱ぎ、ニーチェ哲学で予言された次代の超人の影的存在という意味で、人間としての枠を超えた文字通り超人的存在であり、同時に怪物的存在なのである。

善悪の枠組みの中にクルツを封じ込めるのではなく、彼という存在自体が人間存在および人間社会を逆説的に問いかける普遍的な試金石に相当するというコンラッドの意識が裏付けられるのは、クルツの崇拜者であるロシア人青年の言葉‘You can’t judge Mr Kurtz as you would an ordinary

man'(162)と‘Oh, he enlarged my mind!’ (171)というフレーズである。‘He made me see things—things’ (162)ロシア人青年の言葉は、存在としてのクルツが発するプリズム性を表現する。クルツと向き合い、彼という剥きだしの存在と格闘することで人は自らを、また生の虚飾なき側面をも認識し、受け入れうるのである。

III. ‘mad individualism’的实践

クルツが西洋社会から旅立ちコンゴの中心で生きるなかで目覚めたものを一言でまとめるならば、道徳に関する疑念であり、さらに明確にするならば有史以来、この地上で道徳という概念を形成し、また崇められてきたものに対する疑惑である。これは人間の社会の基盤として機能する善と悪の価値判断そのものを解剖していく行為であり、‘I want no more than justice’ (182)と欲する真理への意志を自覚したクルツによって伝統的モラルへ鋭いメスが入れられる。

確固たる「善」と「悪」のイデオロギーが存在し、その二項対立的思考が支配するヨーロッパ社会特有の精神文化から解放されたとき、クルツは現代に生きる「人間」として生きることを放棄した。現代という檻おろのなかで無自覚のままに生きる柔弱じゅうじやくで中途半端な「善くて義しい者」「終りのはじまり」の人間として生きることを拒否したのである。

クルツによる中庸性の拒絶は、同時に今在る自分を超えていこうとする意志、自己超克の意志に他ならない。彼のこの大なる創造への意欲、欲動が、黙示録の言う熱くもなく冷たくもない生を指す「ラオディキア的生」を歩む近現代人を不安と恐怖に陥れ、クルツへの憎悪を募らせるのである。

ニーチェは生の本質的機能を傷つけ暴力を振るうものと、搾取し破壊するものと定義する。そして人間社会において法が遵守じゆんしゆされている状態を、力を目指している本来の生の意志を制限するものと見なす。つまり、生の本質とは力への意志に他ならない、というニーチェの主張を裏付けるのがクルツだ。クルツはニーチェのいうところの生の本質と直面し、力への意志に目覚めた人物である。ニーチェが告げる「未来の人間の到来」を彷彿させる「来るべきものの影」にクルツは相当する。現代よりも遙かに強壮なる時代である未来の幕開けを告げる人物とは、道徳化された時代である現

代の破壊者であり理想という呪縛の時代である現代からの救済者に当る。

遠隔の地から、彼岸から、みずからの衝迫の力によって駆り立てられてくるあの創造的な精神が訪れるだろう。[.....]これは現実への沈潜であり、掘り下げであり、深まりである。こうして彼が現実からふたたび光のもとに戻ってくるときには、この現実に救済をもたらすのだ。これまでの理想が現実にもたらした呪いから、現実を救済するのだ。(『道徳の系譜学』181)

Heart of Darkness の歴史的背景の裏には、19世紀末のベルギー国王レオポルド2世の統治下にあった「コンゴ自由共和国」で行われていた非人道的な圧制と搾取の問題や、あるいは西洋諸国の狡猾かつあくどい植民地主義の問題があった。これらの国々が正義名分として掲げてきた偽善や虚構と化した正義といった理念を真っ向から破壊、粉碎する存在者がクルツである。社会の潤滑油的な役割を負う偽善や理想、道徳、虚偽に憑かれた近代という時代に、これら建前を一掃し、剥きだしの欲望だけを突きつけ、その時代に蔓延する呪縛に一石を投じるのがクルツである。これを実証するのが、彼を故国へ連れ帰ろうとする支配人に向かってクルツが放つセリフである。

‘Save me!...Don’t tell me. Save *me!* Why, I’ve had to save you....I’ll carry my ideas out yet--I will return. I’ll show you what can be done. You with your little peddling notions—you are interfering with me. I will return. I...’ (169)

クルツとは真理への意志を自覚した認識者である。真理の深淵を覗き込んだ者に狂気のレッテルを貼るのが、良識に支配される現実の常である。しかし、マーロウはクルツが有する鮮烈で果てしない力を説明するとき、狂気の問題を頭脳と魂の領域二つに分類してみせる。

Soul! If anybody had ever struggled with a soul, I am the man. And I wasn’t arguing with a lunatic either. Believe me or not, his intelligence was perfectly clear....But his soul was mad. Being alone in the wilderness, it had looked within itself, and, by heavens! I tell you, it had gone mad. (174)

クルツの魂の苦闘の目撃者マーロウは、クルツが自己との対決を通じて己の魂を凝視し、それに近接することで味わった恐怖と脅威で同時に自らを強め、成熟させる不可思議さを指して次のように表現する。

He [Kurtz] struggled with himself, too. I saw it,—I heard it. I saw the inconceivable mystery of a soul that knew no restraint, no faith, and no fear, yet struggling blindly with itself. (174)

クルツは新たな価値を創造する者である。変態を遂げたクルツは、人間社会を牛耳っている特有な妄念から解放される。彼が到達した認識とは善と悪を超越した苛酷なまでに「誠実」な者、魂の強さを持つ者だけが見出すことのできる善悪の彼岸である。ここに、新たな生の可能性を探るクルツの姿が前景化する。

コンラッドがニーチェ思想の核心を‘mad individualism’と評したことは前にも触れた。コンラッドが捉えたニーチェ思想のコアたる‘mad individualism’を受肉化させたのがクルツという怪物である。ニーチェの生み出した超人ツァラトゥストラは近代社会の集団化と平等化に対する激しい嫌悪と人間存在そのものに対する激しい嫌悪を持っている。彼にとって人間とは克服されるべきものであり、その克服は人間を破滅させるということになる。この破滅という没落のなか、自ら滅びようとする強烈な意志のなかに人間存在の充実を見出すのがツァラトゥストラの主張だ。

クルツの生き方とは「自分自身を越えて創造しようとし、そのために破滅する者」の生き方であり、これはツァラトゥストラが深く愛情を注ぐ在り方である。ツァラトゥストラの論によれば、既成の価値の破壊者で同時に創造者となるには人間の精神が服従と勤勉を示す駱駝らくだから自由の意志を發揮する獅子へ、それからさらに「幼な子」へと三段の変化を遂げなければならぬ（ニーチェ 1883-85: 37-40）。

“Sometimes he [Kurtz] was contemptibly childish. He desired to have kings meet him at railway-stations on his return from some ghastly Nowhere, where he intended to accomplish great things. (176)

王侯たちからの出迎いを希望するクルツをマーロウは「情けないほど子供っぽ」いと見るが、これこそ「幼な子」の精神へと変化を遂げた獅子の姿、ツァラトゥストラの言うところの精神の三段の変化を遂げた者の姿を髣髴させる。ニーチェの分析と同様に、本能や衝動そして力への意志を重視した結果導き出されたクルツ的超道徳とは、悪の底に存在する情熱と狂気、戦慄をも包含したそれである。

クルツの欲望を換言すると「永遠をもとめる激しい欲情」（『ツァラトゥストラ』上巻 159）であり、つまりは「回帰の円環」（『ツァラトゥストラ』上巻 159）を求める思いである。彼は計測可能な地上的時間を克服し、一瞬であって同時に永遠の存在としての円環的時間軸に到達したのである⁸。

IV. ‘mad individualism’の求道者

ツァラトゥストラは神を無みする者であり、生とそれに伴う苦悩を肯定し、嘔吐を克服した者である。クルツの場合、コンゴの内奥で原始的な生の充実を図るにつれよろこびを貪婪に味わい尽くし、切実にすさまじく自分自身を欲し永遠という円環の意志を認識することになった。永劫回帰の認識者としての声明とも解釈できるのがクルツのセリフ‘I will return. I’ll show you what can be done....I will return.’ (169)であり、原始的で野性が跳躍するクルツにとっての聖地に注ぐ眼差しと声音である。

“Do you understand this?” I asked.

“He kept on looking out past me with fiery, longing eyes, with a mingled expression of wistfulness and hate. He made no answer, but I saw a smile, a smile of indefinable meaning, appear on his colourless lips that a moment after twitched convulsively. “Do I not?” he said slowly, gasping, as if the words had been torn out of him by a supernatural power. (175)

異邦の放つエネルギーに魂を虜にされたクルツは、その大いなる力を憎悪し、また深く愛し、それを欲望する。

‘Close the shutter,’ said Kurtz suddenly one day; ‘I can’t bear to look at this.’ I did so. There was a silence. ‘Oh, but I will wring your heart yet!’ he cried at

the invisible wilderness. (177)

以上の箇所は、クルツの「おいなるあこがれ」と没落への意志を提示し、魂の永劫回帰を認識する様を顕在化する⁹。ニーチェが『権力への意志』、『ツァラトストラ』、『道徳の系譜学』で取り組んだ思想を、コンラッドは約 16 年後 *Heart of Darkness* (1899)の世界に持ち込んだ。

I saw him open his mouth wide—It gave him a weirdly voracious aspect, as though he had wanted to swallow all the air, all the earth, all the men before him. (166)

I was struck by the fire of his eyes and the composed languor of his expression. It was not so much the exhaustion of disease. He did not seem in pain. This shadow looked satisfied and calm, as though for the moment it had had its fill of all the emotions. (167)

クルツはコンラッドが捉えた‘mad individualism’としてのニーチェ哲学を反映した権力を意志する存在者であり、上記のようにカニバリスティックな怪物である。

大江精志郎は『ニーチェ全集』の付録で「同一なるものの永劫回帰について」という題目で書いている。「同一なるものの永劫回帰とは、このような根源的存在が発現する永劫に持続する創造或は造化の力の在り方を象徴していると理解されよう。人間もまたかかる存在の力に関与する力への意志を保有する限りにおいて価値ある生を実現し、かかる意志の体現者としての超人たる資質をもちうるのである」。この認識と通底する意見としてケネス・グレーム (Kenneth Graham) のクルツに関する省察が挙げられる。グレームは現代社会のメカニズムを異化してみせるトリックスター的な日常性の転覆力を発揮するクルツを‘modern hero’と見なし、先に紹介したワッツの指摘と同様、禁断の経験を追究するクルツの姿勢にファウスト的崇高さを読みとっている。

Kurtz has many faces in Conrad's and in Marlow's shifting presentation of

him, but a major one is that of the specifically modern hero: diabolic in the concentration of his deviant will and his intellectual gaze, pursuing forbidden experience with the inverted dedication of a questing knight-at-arms, contemptuous of others and of himself, radical and unsatisfied, without outer convention or inner core, the lonely alien in our midst. He is the subverting *étranger*, the man-without-qualities (in Musil's phrase), who overthrows all the impostures and seeming values of the world around him: (Graham 1996: 210-11)

しかしながらマーロウの‘a shadow’ ‘an initiated wraith’ ‘a shade’ ‘phantom’ という形容が示す通り、クルツは崇高なる存在者として完成されておらず、超人ではない。ツアラトウストラにある神々しさがクルツには欠如している。しかしながら権力への意志を赤裸々に表明し、貪婪に権力を所有し尽くし、近現代的欺瞞の対極に生きる存在者としてクルツは君臨する。

ニーチェの超人思想をコンラッドの世界感覚に移植したときに誕生したのが、それ自体が悪でありながら同時にもう一つの悪を暴き出す装置として機能する怪物、クルツである。クルツの怪物性に直面した時、支配人 (The manager) はマーロウに‘the method is unsound’ (169)と指摘するのに対しマーロウは‘No method at all’ (169)と応じる。この短いやり取りの中に人間が依存している上辺を取り繕い、クルツを糾弾することで自己浄化を図る世界のおぞましい縮図が展開しているのである。

ニーチェの思想を批判しつつも、その極限的‘mad individualism’のなかにこそ、このような近現代人の欺瞞を暴く鏡として機能する力があることに気づき、さらに、欺瞞性自体が所有する権力そのものを剥奪・奪取する強烈な力をニーチェの思想に見いだしたコンラッドは、ニーチェの‘mad individualism’をツアラトウストラとはベクトルを異にするクルツという怪物を創出し再構成した。この怪物は一つの生々しいヴィジョンとして永遠に人間存在にコミットしてくるのである。帰国後、クルツの許婚の庭先でマーロウが視るクルツの幻影はそれを物語る。

I had a vision of him on the stretcher, opening his mouth voraciously, as if to devour all the earth with all its mankind. He lived then before me; he lived as

much as he had ever lived—a shadow insatiable of splendid appearances, of frightful realities; a shadow darker than the shadow of the night, and draped nobly in the folds of a gorgeous eloquence. (182)

コンラッドの世界認識がニーチェのそれといかに近接しているかはコンラッドのカニンガム・グレーム (Cunningham Graham) 宛書簡が端的に示す。

It[the knitting machine] knits us in and it knits us out. It has knitted time space, pain, death, corruption, despair and all the illusions--and nothing matters. I'll admit however that to look at the remorseless process is something amusing. (CL I: 426)

サイドは、1897年12月20日および1898年1月14日付けのカニンガム・グレーム宛の書簡で言及されている‘the knitting machine’というコンラッド独特な世界の捉え方とニーチェの『権力への意志』の最後の項目との共通性を挙げている¹⁰。

コンラッドは1899年2月8日、カニンガム・グレームに宛てて「社会というのは本質的に犯罪を生むもの——そうでなければ、それは存在しないでしょう。利己主義こそが、あらゆるもの——まったく全てのもの——我々が嫌うものであろうと愛するものであろうと、すべてを維持するのです」と書いている (CL II: 157-61)。

確かにコンラッドはニーチェの思想を‘mad individualism’¹¹と批判した。しかしこの書簡やクルツが実践する権力意志の姿勢、その苛烈で真摯な在り方の原型にはニーチェの思想が多大なる影響を及ぼしている。ポーズやスタイルで防護した世界という制度を穿つ衝撃力を普遍的に生成し続ける源泉がニーチェの‘mad individualism’にあることを認知したコンラッドは、いわば偽装された現世界を真っ向から挑発し、脅迫し、侵犯する存在者として「怪物」クルツを創造したのである。ニーチェ思想を‘mad individualism’¹²と評したコンラッドの感覚がそのままに継承されているからこそ、ニーチェの超人ツァラトゥストラに照応させてコンラッドは「怪物」クルツを創造したのである。

やがて到来する強壮な時代を告げるツァラトゥストラが神々しさと聖性

を身に帯びているのに対し、コンテンポラリーな時空と等身大の現存在である人間からインスパイアされている「怪物」クルツは、神話的要素というヴェールに隠されることもなく、時間的限界を超越していつの時代にも顕現する。同手紙で「私は自分自身にたいして[.....]猛烈な利己主義を実行しているのです」と述べるコンラッドの言葉には、確実にニーチェ思想のエコーが響き、自らの生に対して虚飾を排してコミットしようとするコンラッドの意志、スタンスが明かされている（CL II: 157-61）。

コンラッドはニーチェ的‘mad individualism’の実践者としての怪物クルツを通してカーニヴァルの反世界を描出し、人間存在、また社会や価値基盤といった諸々のシステムを異化し揺さぶりかけてくるのである。このようにして、社会およびその成員である人間存在が持つ虚偽性は、権力意志の権化で‘mad individualism’の求道者であるクルツという怪物を通して逆説的にヴィジュアル化され、現象として今、ここにある時代の病理ならびに人間の仮面の下に潜むグロテスクな怪物的闇を映し出す視覚装置として機能するのである。

註

¹ “The horror!”の解釈を巡っては他に4通りの可能性を挙げている。(1) Kurtz condemns as horrible his corrupt actions, so that this ‘judgment upon the adventures of his soul on this earth’ is ‘an affirmation, a moral victory.’ (2) Kurtz deems hateful but also desirable the temptations to which he has succumbed: the whisper has ‘the strange commingling of desire and hate.’ (3) Kurtz deems horrible the inner nature of everybody: ‘no eloquence could have been so withering as his final burst of sincerity’ when his stare ‘penetrat[e] all the hearts that beat in the darkness.’ (4) Kurtz deems horrible the whole universe: ‘that wide and immense stare embracing, condemning, loathing all the universe...“The horror.”’ ‘Explanatory Notes’ to *Heart of Darkness and Other Tales*, Oxford: Oxford UP, 2008, 215.

² *Blackwood’s Magazine* に連載当時(1899年2月から4月にかけて)、「face」と‘Did he live’の表現の間には次のような補足的表現が挿入されていた。‘the expression of savage pride, of mental power, of avarice, of blood-thirstiness, of cunning, of excessive terror, of an intense and hopeless despair.’

³ 1899年10月16日付のエドワード・ガーネット (Edward Garnett) 宛てコン

ラッドの書簡には、ニーチェに関するガーネットのエッセイを受け取った旨、およびエッセイに関して簡単に言及している。ここからもコンラッドがニーチェを権力への意志や超人思想、価値への転換の提唱者と認識していることは明らかである。詳しくは Said の *Conrad and Nietzsche* 参照。

- 4 コンラッドのニーチェ思想に対する矛盾した反応については Allan H. Simmons ed, *Joseph Conrad in Context*. Cambridge: Cambridge UP, 2009 の 165-66, 185, 234 参照。
- 5 H. M. Stanley alleged that the ‘unfledged’ European in Africa would ‘very readily explode his unspeakable passions.’ (HS i. 517) Norman Sherry note that ‘Arthur Hodister assisted at the fifteen wedding of a chieftain, Tyabo, and witnessed human sacrifices decreed by Tyabo during funerary rites. In 1892 *The Times* reported that, during further explorations in the Congo, Hodister was captured and killed, his head stuck on a pole, and his body eaten.’ *Conrad’s Western World*, Cambridge: Cambridge UP, 100-101, 110-11.
- 6 In 1892, it was reported that fifty-two human heads on stakes surrounded a station at Yanga (in the Congo) where two white men stayed (*Conrad’s Western World* 117-118). E. J. Glave noted in 1895 that at Stanley Falls ‘twenty-one heads [...] have been used by Captain Rom as a decoration round a flower-bed in front of his house.’ ‘Cruelty in the Congo Free State’, *Century Illustrated Monthly Magazine*, 54, 1897, 706.
- 7 この‘the life sensation’という感覚を、コンラッドは *Lord Jim* (1900)のなかでシュタイン(Stein)の言葉で「生の破壊的要素」‘the destructive element’(214)と言い換えている。近現代人は麻痺と盲目の状態にある、とすればその中庸性と矮小化の破壊と価値転換への挑戦を追究するクルツの姿勢は、まさに生を直視することで、グロテスクな生の側面に目覚め、生の破壊的要素のヴィジョンを生なまの感覚で受け止め格闘した、という意味で現実という名の理想または幻想から目覚めを迎えたと言える。
- 8 「永劫回帰」と「円環」に対する肯定とは、「酔歌よいか」の章で示されるように一瞬の現在性に永遠を見出し、生の直視が要請する厭わしく嘔吐を催させるほどの世界への回帰を主体的に決断する、自己を超克するものである。言い換えると、自己という限界領域を穿つエネルギーを永遠に生産し続けるほどの、強烈な欲望への飢餓感の認識者となることを意味している。以上を踏まえると、クルツの野性を所有することへの欲望を代弁するセリフ“I will return”は、力と欲望の暴走により反世界的空間の主君となった彼の円環的反復と回帰への意思とその宣言に相当する。

- 9 クルツの“The horror! The horror!”という言葉とツァラトゥストラの大いなる喜びの下に為される永劫回帰とのギャップに関して補足する。クルツのこのセリフは信念の表明であり真実が持つ破壊的なまでに赤裸々な性質を総括した言葉である。欲望と力の露わな姿を追究したクルツが、生の直視と強烈な意思の合一を認めるところからくる勝利と破滅の融合であり、決意と誓約の証左である。しかしながらツァラトゥストラの永劫回帰に伴う栄光と歓喜の要素がクルツのそれに見当たらないのは、ニーチェの思想の核心を‘mad individualism’と批判し同時に評価したコンラッドの認識が反映されているからである。
- 10 Edward W. Said, ‘Conrad and Nietzsche’ in *Joseph Conrad—A Commemoration—*. Ed. Norman Sherry, London: Macmillan, 1976, 72-74.

参考文献

- Conrad, Joseph. *Heart of Darkness and Other Tales*. Ed. Cedric Watts. Oxford: Oxford UP, 2008.
- . *Joseph Conrad: Life and Letters*. Ed. Georges. Jean-Aubry. 2 vols., New York: Doubleday, 1927.
- . *Joseph Conrad's Letter to R. B. Cunninghame Graham*. Ed. C. T. Watts. Cambridge: Cambridge UP, 1969.
- . *Lord Jim*. London: J. M. Dent and Sons, 1900.
- . *Notes on Life and Letters*. London: J. M. Dent and Sons, 1949.
- . *Tales of Hearsay and Last Essays*. London: J. M. Dent and Sons, 1963.
- . *The Collected Letters of Joseph Conrad*. Ed. Frederick R. Karl and Laurence Davies. 9 vols., Cambridge: Cambridge UP, 1983-2007.
- . *The Mirror of the Sea and A Personal Record*. Ed. Zdzisław Najder. Oxford: Oxford UP, 1988.
- Graham, Kenneth. ‘Conrad and Modernism’. *The Cambridge Companion to Joseph Conrad*. Ed. J. H. Stape. Cambridge: Cambridge UP, 1996. 203-22.
- Said, Edward. *Beginnings: Intention and Method*. New York: Columbia University Press, 1985. [エドワード・サイード『始まりの現象——意図と方法』山形和美・小林昌夫訳、法政大学出版局、2004年。]
- . ‘Conrad and Nietzsche’. *Joseph Conrad—A Commemoration—*. Ed. Norman Sherry. London: Macmillan, 1976.
- . *Culture and Imperialism*. New York: Vintage, 1993. [エドワード・サイード『文化と帝国主義』大橋洋一訳、全二巻、みすず書房、2001年。]

- . *Orientalism*. New York: Vintage, 1978. [エドワード・サイード『オリエンタリズム』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、1987年。]
- Sherry, Norman ed. *Conrad's Western World*. London: Cambridge UP, 1971.
- . *Joseph Conrad—A Commemoration—*. London: Macmillan, 1976.
- . *Conrad: The Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul, 1973.
- Simmons, Allan H. ed. *Joseph Conrad in Context*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Stape, J. H. ed. *The Cambridge Companion to Joseph Conrad*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Tanner, Tony. ““Gnawed Bones” and “Artless Tales”—Eating and Narrative in Conrad’.
Joseph Conrad—A Commemoration—. Ed. Norman Sherry. London: Macmillan, 1976.
- ニーチェ、フリードリッヒ『権力への意志』原佑訳、ニーチェ全集第 11-12 巻、理想社、1977 年。
- .『善悪の彼岸』木場深定訳、岩波書店、1992 年。
- .『ツァラトゥストラはこう言った』氷上英廣訳、全二巻、岩波書店、1987 年。
- .『道徳の系譜学』中山元訳、光文社、2012 年。
- .『悲劇の誕生』秋山英夫訳、岩波書店、1986 年。

(いまがわ きょうこ 九州工業大学 非常勤講師)